

Principal's Letter No.9

# 樗だより

2020. 4. 14. Tue.



## 樗だより 復活！



皆さん、こんにちは。昨年8号をもって休刊状態となってしまった「樗だより」を復活させます。ささやかなお便りながら、楽しみにして下さった人々もあり、続けられなくなってとても心苦しかったのですが、もう一度仕切り直して再出発します。本当は、今年の1月、何とか修士論文の審査をパスし、9月卒業の目処も立ったので、よし、新年を機に「樗だより」再開！と思っていました。ところが、その途端に「コロナ」の問題が勃発。2月、3月があっという間に過ぎてしまいました。けれども、こんなときこそ、発信しなくてはと思います。頑張って色々な話題をお届けします。どうかよろしくお祈りします。

## 新型コロナウイルス感染症との3つの闘い



私は、この新型コロナウイルスとの闘いには3つの闘いがあると思っています。

一つは、当然ながら「ウイルスとの闘い」です。感染防止のために、自分ができることをすることです。外出自粛、社会的距離の維持、手洗いや咳エチケットの励行などは、全員がやらなければ効果がありません。自分が感染しないため、だれかを感染させないために、感染予防対策は徹底してやる必要があります。

二つ目の闘いは、「自分との闘い」です。特に生徒の皆さんにはこの闘いに負けてほしくない。3月の休校以来自宅学習は実に50日以上になります。その間、主体的に学ぶ人と無為に時間を過ごす人とは、ものすごい差がついてしまうことは容易に想像できますね。一人で勉強するのは、しんどいことかもしれません。ついだらけてしまったり、わからないからといって投げ出してしまったり、ゲームに手を伸ばしてしまったり……。でも、だからこそ、自分自身で学ぼうという意欲をかき立て、自分自身で自分の行動をコントロールできるようになりたいではありませんか。簡単ではないけれど、そして、何度も失敗するかもしれないけれど、あきらめないでください。生徒の皆さんには、以前にも言いましたね、「人生は繰り返せないが、何度でもやり直せる」と。揺らがない自分との闘いを続けてください。

3つめの闘いは「差別との闘い」です。今日、湯崎広島県知事は県民に対して次のようなメッセージを發しました。

「新型コロナウイルス感染症の患者の方への 誹謗中傷やプライバシーをネット上で公

表するような行動が 現在, 問題になっています。さらに, 自らの感染リスクを抱えながら, 日々対策にあたっている医療スタッフの方への差別も 問題になっています。【中略】新型コロナウイルス感染症は, どなたにも感染の可能性のある病気です。県民の皆様一人一人の思いやりと良識ある行動が 感染拡大を防ぐことにつながるということを改めて申し上げます。」

私も知事と同じ気持ちです。今、医療スタッフは、自分が感染する危険も顧みず、疲労こんぱいしながら必死に頑張っています。悪いのは病気であって、感染した人ではありません。始業式でも話しましたが、今、私達の間力が問われているのです。「常に神とともに歩み社会に奉仕する」という、この広島なごさ集う皆さんなら、自らの心に恥じない、思い遣りに満ちた行動をとってくれると信じています。

## 大林監督、逝く



4月10日、尾道市が生んだ不出生の映画監督、大林宣彦監督が亡くなりました。終生、戦争反対を貫き、愛情あふれる作品を作り続けた方でした。

私は、大林監督と2017年に直接お会いして、色々お話をさせていただいたことがあります。2017年は第40回全国高等学校総合文化祭が広島で開催された年です。しかし、大会開催年になっても特別審査員が決まらず準備委員会は頭を抱えていました。特別審査員は、開催県にゆかりのある著名人に依頼することになっています。大林監督の名前も候補に上がっていましたが、誰もがとても無理だろうと思っていました。でも、私は、ダメ元で頼んでみることにしたのです。色々なところに問い合わせ、どうにか監督の事務所に電話できたのですが、電話口に出た方は、最初、予想通り引き受けるのは難しいと言われました。でも、私は総合文化祭のことを説明し、広島大会に大林監督に来ていただく意義を心を込めてお話ししました。すると、その方は、「広島」と聞いて、「それなら引き受けないとはいけませんね、伝えてみます」と言って下さったのです。結果的に監督は来て下さいました。そして、大会前日、広島駅で待っていた私の前に、監督と奥様の恭子さんが現れたのでした。なんと、奥様は数日前に足を骨折されていたのに、監督に付き添って来て下さいました。

監督は大会で、写真をとるとき多くの人があるピースサインについて話をされました。ピースサインは様々な歴史を持っていますが、その一つに、イギリスの首相チャーチルが、原爆によって日本が降伏し、戦争に勝ったことを示威するサインとして使ったという歴史があります。大林監督は、高校生に、特にヒロシマの高校生には使ってほしくないとおっしゃって、代わりに手話の「I LOVE YOU」のサインを教えてくださいました。このサインは、世界共通なのだそうです。



監督は終始優しい笑顔、そして穏やかな語り口でした。でも、私は、その中に平和を願う心、ヒロシマの心を忘れないという強い意志を感じたのです。監督が肺がんのため、余命3ヶ月を宣告されたのは、それからまもなくでした。「広島のためなら」。そう言って下さった監督の言葉を私は決して忘れません。心からご冥福をお祈りします。

(19日以前の原稿で、大林監督奥様のお名前の漢字を間違っていましたので訂正しました。申し訳ありませんでした。)